

Eureka VII

六年制通信 No.6 令和2年6月12日(金)号

ざへんしゆう 坐辺師友

この言葉を知ったのは北大路魯山人の伝記でしたか。随分前のことなので本の名前は忘れましたけど、この言葉は時々思い返しています。口に出してみても響きがいいですね。ただ、これは二通りの意味に取れますから、一体どちらの意味が正しいのかわからなくなることがあります。

「坐辺」は「自分の身边」という意味ですから、自分の身近なところには師と呼べる人や友とすべき人がいなくてはならない、それが坐辺師友の一つの解釈です。これはもっと強く、それ以外の人間を遠ざけよという意味にも取れます。己を磨くには尊敬できる師と優れた知見を持つ友が必要だ、逆に師もなく見識のない友に囲まれていると自分がどんどんダメになる、だから自分を甘やかしてしまうような人とはつき合うなというわけですね。そういった戒めとして、この言葉を使う人も多いと思います。『論語』の学而第一の、それもはじめの方に出てきますが「己に如かざるものを友とするなかれ」もよく似た意味で、自分の周囲には尊敬できる友がいなくてはいけない、自分より劣る人に囲まれていい気になってはいけないという意味ですね。ビジネスの世界でもイエスマンに囲まれていると、つまり自分を甘やかす人に囲まれていると自分が実力以上にできると思い込んで失敗すると言われています。恐らく魯山人もこの意味で坐辺師友を座右の銘としていたのではないかと思います。

もう一つの解釈は、吉川英治の『宮本武蔵』にある発想です。作中では、佐々木小次郎が非常な自信家で傲慢な男として描かれているのに対し、武蔵は謙虚な求道者として登場します。その武蔵が修行の末に「我以外皆我師(われいがいみなわがし)」という境地に至るのですね。ここに「友」は出てきませんが、自分以外は誰もが自分の師であり友であると解釈してかまわないと思います。私たちは一人では何もできない状態で生まれてくるわけですが、それ以来、実に多くの人とかかわりを持って、ということは何らかの影響を受けて生きてきました。親や先生、学校の友だち、あるいはテレビの中の人々、漫画の登場人物、本の世界の人、歴史上の人物、(ひょっとしたら人間以外のものもあるかもしれませんが)、その他本当に多くの、実際にはもう名前すら忘れてしまっているような人たちも含めて、その多くの人々の中で成長してきたことに間違いはないわけです。私たちを成長させてくれたという点で、私たちにいかかわってくれた全ての人を師と思えと、そう武蔵は言うのです。

しかし、これは難しいですね。世の中には愚かな言動をする人が確かにいます。君

たちもやがて自分とかかわる人々、つまり坐辺にいる人々の中に、自分には悪影響しか及ぼさないのではないかと思える人に出会うでしょう。君たちが成長すればその分だけかわる人の数は増える一方なのですからね。その時に、その人の中に何か自分にとって学ぶべきものを見つけて成長の糧としなさい、少なくともそういう姿勢を持ちなさいと、武蔵は言っているのです。ただし、学ぶべきものは何もその人の長所だけとは限りません。「人の振り見て我が振り直せ」ということわざがありますが、他人の愚かな言動を自分の反省材料に使うというやり方で、その人から学ぶということもできます。武蔵によると、学ぶというのは非常に積極的な行為であることがわかりますね。魯山人は師や友を選べと言ひ、武蔵は誰もが師だと思えばよいと言うわけですが、さて皆さんはどちらに魅力を感じますか。

さて、ここで魯山人も武蔵も師や友とすべき人について、好きか嫌いかという指標を用いていないことに私たちは注目すべきだと思います。武蔵は誰もが師なのですからそもそも好きか嫌いかの指標はないわけですが、魯山人も自分の周辺に好きな人を置けとは言っていない。人を好き嫌いで判断してはいけないということを、坐辺師友のもう一つの側面として指摘しておこうと思います。

今週のおすすめ

・菊池 寛 『恩讐の彼方に』 (岩波文庫)

大正時代の作品。最近再読して大いに感銘を受けました。

旗本を切って、その愛人と逃げた武士。二人で峠の茶屋を開き旅人を襲って暮らす大悪人になり下がります。しかし、自らの罪に恐怖するようになり心を入れ替えて仏門を叩き出家をします。了海と名を変えた武士は、山の難所に村人が命を落とすのを目撃し、岩場にトンネルを掘ろうと誓願します。一方切られた旗本の息子はこの了海を敵(かたき)と狙います。はじめは冷ややかだった村人も了海の一心に打たれ、了海に協力するようになります。自ら進んで敵を討たれようとする了海だが…。

若いころに読んだときは、それほど感銘を受けませんでした。若いということは善悪の区別に厳しいということでもあります。善と悪は 100 対 0 であって、しかも必ずどちらかしかないと、そう考えがちです。年齢を重ねると、人の心には善と悪とが同居するということを、それだから人間はそう単純ではないということを私たちは知っていきます。ただ、現代は年齢を重ねても若者のような価値観を持ったままの大人が多いように思います。

この物語には人間の持つ重厚さ、あるいは不思議さ、理屈では割り切れない心の動きのようなものがよく書かれています。自分勝手な村人たちの行動も、了海が罪を意識するようになったきっかけも、今ならよく理解できます。

さて、若い君たちはどう思うのだろうか。今思い出したのだが池波正太郎に『隠れ蓑』という短編があったな。敵に追われる男がとった行動が秀逸でした。確か『剣客商売』シリーズのどこかにあるはず。探して読んでごらんください。

BGM は AI の みんながみんな英雄 でした…。